藤原昭夫先生の人と学問

齊藤壽彦

藤原昭夫先生が2001年7月25日に忽然として幽明境を異にされようとは，誰が予想し得たであろうか。先生の温顔と指に挟んだタバコを天に向けて美味しそうにふかされるお姿が，今でもありありと脳裏に浮かんでくる。先生とお別れしなければならなかったことはまことに痛恨のきわみである。

先生は1970年4月に千葉商科大学に就任されてから，学部では社会思想史，経済学史，研究指導を担当され，大学院では修士課程で，日本経済思想史研究，社会思想史研究および同演習，博士課程で日本経済政策思想論を担当された。教育面において熱心であり，とくにレベルを落とさないように努めておられた。学者として学術研鑽の厳しい姿勢を少しも崩されることがなかった。また，1995年4月から2年間，千葉商科大学付属図書館長として教学運営の要職にあたられた。何事にも率先垂範身を挺して大学発展のため尽瘁されたのであった。学外においても早稲田大学の非常勤講師を勤められ，また社会経済史学会評議員，日本経済思想史研究会編集委員，地方史研究協議会・史学会・経済史学会・社会思想史学会会員として学会活動を行われている。

私は四半世紀以上も千葉商科大学という同じ職場で先生と教育・研究について語りあってきた。研究室が隣り合っているという関係から，後輩の私がしばしば先生の研究室に押しかけて教えを乞うことがあった。先生は学内行政に深入りすることを回避されつつも学内行政に無関心ではいられなかったし，教育史にも関心をお持ちであったから，私は，学内の改革などについてしばしば先生と意見交換を行った。また，日本経済思想史研究会の雑誌を発行する際には私は相談にあずかった。慶應大学出身の私は早稲田大学出身の藤原先生が慶應義塾の福沢諭吉を研究されるのを

当初は意外に思っていたが，四半世紀以上も福沢諭吉の経済思想を一貫して研究されるのをみて，これこそ学者の鑑であると敬服するようになった。アメリカからの留学から帰られてからは研究重視のエリート主義的傾向を強められたように感じている。

先生は日本経済思想史，日本経済学史を専攻された。先生の研究テーマは福沢諭吉の経済政策思想と欧米経済学の日本への導入史の二つであった。先生の研究方法は，①研究史の整理を重視する，②資料・事実を可能な限り広範に収集する，③既成のものにとらわれぬ独自の理論的枠組みの構築を行うというものであった。

先生は千葉商科大学から1981年度に１年間の海外留学の機会を与えられ，ウエーランドが学長を勤めたブラウン大学を訪問したりしながら福沢に強い影響を与えたウエーランドに関する資料の収集に努められた。私はその研究過程を身近でつぶさに見ている。先生は10年近くにわたるウエーランド研究の成果を『フランシス・ウエーランドの社会経済思想―近代日本，福沢諭吉とウエーランド―』という大著にまとめられ，1993年に日本経済評論社から出版された。この労作に対し慶應大学から同年に博士（経済学）の学位が授与されている。これに甘んずることなく，1998年には福沢諭吉の経済思想研究の成果を『福沢諭吉の日本経済論』としてまとめられ，同じく日本経済評論社から出版されている。慶應義塾大学福沢研究センター客員所員となられたのはこのような研究の経過によるものである。藤原先生はまさに福沢研究の代表的研究者の一人としての地位を確立されたのであった。

先生はさらに，杉原四郎先生などとの共著で『日本の経済思想四百年』という本を刊行されている。加うるに『山梨県議会史』の執筆にも参加されている。まことに学者として立派であったといえる。福沢研究を中心とする先生の日本経済思想史研究については杉原四郎氏の「藤原昭夫と日本経済思想史―福沢研究を中心として―」（『日本経済思想史研究』第２号，2002年３月）という論文を参照されたい。

福沢諭吉の経済思想に関するご研究をライフワークにされておられた先生がこれからそのご研究の集大成をされようとされていた矢先に病に倒れられ，その志を遂げられなかったことを思うとき，先生の悔しさは幾ばくかと推察する。

千葉商科大学が1998年２月に創立70周年を迎えることとなり，記念誌が97年11月に発行されたが，先生が編集委員長として，原稿の整理，関係者へのインタビュー

などに献身的に精力的にあたられた。私はその補佐として何日も一緒に編集作業とインタビューをしたことを，今なつかしく思い出す。

藤原先生は特に趣味というものをお持ちになられなかったようで，学問が趣味というような方であった。検査入院から肺癌を封じ込める治療に移られた後，学内の友人達とともにご自宅にお見舞いに伺った時には，授業のことを大変気にかけておられた。2001年の4月には肺癌という身でありながら大学に来られ，その後も大学でお姿を拝見した。病気療養中も私はしばしば藤原先生から電話をいただき，大学のことについて話をした。藤原先生は大学を片時も忘れることができないようであった。逝去される直前まで職場復帰に備えてリハビリに励んでおられたという。

先生の熱心な研究と教育への情熱，先生のすぐれた人格と該博な学識は本学と学界の発展に大いに寄与したといえようが，また私はきわめて多くのことを先生から学ばせていただいた。ここに先生のご功績と先生への感謝を記して，その記憶を永久にとどめたい。